

任運にんうん騰々とうとう

四月は人それぞれが新たな希望で出発する季節。しかし、その陰にひとり身を引いていく定年退職の一群もいる。

定年退職——これほど前から予期さるべきことながら、本人にとって思いがけなくやって来たと思われるものはない。それに直面して狼狽ろうばいした自分の場合を、今もまざまざ思い浮かべる。

県の職員だったころ、こんな話を聞いた。すでに退職した某課長が「家の玄関に県の黒塗りの車が横づけされなくなった。それが一番寂しい」といったことを。その時は哀れな話と思ったが、今はそう思わない。

彼にとって車一台が欲しいわけではあるまい。公用車に代表される県職現役の地位の消失が悲しいのである。世間は老兵当然消えゆくべきものと決めてかかっており、退職者をまるで異人種のごとく見る。それは全く理不尽な仕打ちだ。退職してみても、初めてそれが実感できるようだ。たしかに少数者は自ら老兵として退いていく。でも大多数は消されゆく運命に怨念かんを抱き続ける。声なきままに。

では、お前の場合はどうだった。ふつう県は再就職を世話してくれる。非妥協的性
格や政治的ふくみも感じて、私にそれを当てにする立場はなかった。しかし、卑小に
も一抹の期待もあり、心は揺れ続けた。その最中、兄から忠告の電話。「県の世話を
当てにするな。あつても受けるな。みじめな思いするだけだ」。

この一言で迷いは瞬時に吹っ飛ぶ。小は小なりのある日の覚悟であろう。自力でデ
ザインできる余生を歩もう。念願の老人ホームを計画、条件に恵まれ退職前に準備で
きていた。

老人ホームの堂守^{どうもり}をして六年が流れた。四月の県の人事異動を見るたびに私は自問
する。私はまだ現役か、それとも隠棲^{いんせい}の身かと。

なぜ自問をくり返すのか。老年は選択と判断を迫られているからである。現役で生
きるか隠棲を選ぶか。どれに価値をおくか。それは全くひとそれぞれの生き方の主体
性の問題である。私にとって、迷う時、僧良寛の「任運騰々」の語が胸中に輝きわた
らねばならない。

(一九八二年四月一日)